

『1円硬貨で厄祓い』



医療法人昭仁会

介護老人保健施設 四季の里(埼玉県新座市)

支援相談員 前島 圭

初めから私事で恐縮ですが本年私は厄年を迎えました。

今年の年始休みが長く特にすることもないので、どこかいい厄除けスポットがないかをネットで調べていたら、面白い厄除けの風習があるお寺を見つけた。徳島海部郡美波町にある『医王山 薬王寺』というお寺である。四国八十八カ所巡り第23番札所であり、徳島県の南部、高知県にほど近い沿岸部の旧地名『日和佐(ひよりさ)』というウミガメの産卵場所として有名な場所に位置する。以前、NHKの朝の連ドラ『ワエルかめ』の舞台と言えは判る方もいらっしゃるだろう。神龜3年(726年) 行基菩薩が聖武天皇の勅願を受け建立。また弘法大師(空海)が42才時の弘仁6年(815年)平城上皇勅命により、本尊の薬師如来を彫って再興したといわれるそのお寺は、本殿に続く階段に現在のわが国最小通貨単位の硬貨である『1円玉』を一段づつ置くことで、身についた厄を落とすとい

う奇習で徳島はあるか全国的にも知られているという。いつもは祈禱料を納め数十分のお祓いに耐える厄払いより、自ら能動的に厄を落とす(祓つ)ということは何となく効く気がする。「これは面白い」と思わず膝を打ち、元旦より自家用車にて出掛けることにした。徳島市内のホテルに宿をとり、翌日の『薬王寺』参拝に備える。

次の日の朝食をホテルでとり、出発の準備をしていた時、重大な事に気付いた。肝心な厄払いに必要な『1円玉』を用意していなかったのである。商店で何かを買ってお釣りを1円玉でもらおうと考えるも1月2日にやっている商店はコンビニだけ。お釣りの融通をきいてくれそうな個人商店は駅前でも当然ながら閉まっている。仕方ないのでホテルの精算時に100円玉を1円玉にかえてもらえないかを駄目元でお願いした。20代の若い女性ホテルマンは私の突然の申し出に「瞬間」えっ?という表情をされるも「はい、大丈夫ですよ。」と棒上になった1円玉と両替してもらえた。彼女の反応について誤解を証明したくなり、「実は薬王寺に厄除けに行くのです。」という終わらない前に、彼女は全てを合点したように笑顔になり、「そうですか、厄除け有名ですよね。お氣をつけて行ってらっしゃい。」と声をかけてくれた。やはり徳島では薬王寺の厄落としはかなり有名なものなのである。

さて、ホテルを出発後徳島市内から自家用車で国道を1時間強走っていくと、急に田舎の道路にもかかわらず渋滞が始まった。ナビを見ると『薬王寺』より1kmも手前である。参拝渋滞である。15分程の渋滞をやり過ごした後に漸く駐車

場へ入れた。山の中腹にある境内には参拝者の行列が見え、さらに奥には朱色の閻魔様の帽子を逆さにしたような特徴的な形の塔がそびえていて、歴史あるお寺の雰囲気を感じ出している。塔には登れるようで上から手を振っているお子さんの姿もあった。車から下りて華やかな露店の前を通り、入り口まで行くと既に1円玉が舗装された道に数十枚以上キラキラと日の光りを受け輝いている。ここからもう1円玉を置いたのか、参拝者の靴についたものがこぼれ落ちたのかは不明。坂まで続く参道の途中には歴史小説家である有名な吉川英治や司馬遼太郎の作品の舞台となった記念の石碑があったりする。その後は女坂3段、男坂42段の男女厄坂61段に1円玉をおくのだが、当方は42才の男厄の為、女坂とはして男坂より厄除けの儀式を開始する。周りを見ると皆一様に1年間このために集めていたのか、しわしわのビニール袋を持った人がおもしろいことに1円玉を置いていた。中には貯金箱に入れて持ってきている人も。ただ坂の幅も狭く、初詣ということからほとんど人が来る為に、悠長にお金を置くことは許されない。中には端のほうで一段づつ時間をかける人もいるが、ほぼ皆、時間をかけずにパッと小銭を置く事になり、きれいに置くことは難しい。また、階段に積み重なった1円玉を参拝者が階段ごと踏みしめ昇る為、あたりで1円100円が見られる。また、何もわからない小さい子供が必死に1円玉を拾っているのを母親が「駄目!厄を拾つわよ!」と止めさせる光景も見られる。あと厄年と思いき年齢の参拝者以外の例えば子供さんや高齢者の方がこの厄払い儀式に参加していた。このことからこの奇習が



参拝者による厄除け儀式

この地にすっかり根付き、民間信仰の年中行事としてまた手軽な娯楽の要素としても受け入れられていることを伺わせた。私は100枚のコインをポケットに崩し入れ、階段にさしかかっただけから多少中腰気味に1円玉を置いていく。始めは心の中で手を合わせるも、階下からのブッシュや姿勢も辛く正直邪魔くさくなる。結局は情性で1段になんと1枚置ければよく、またなるべく転がさぬようにすることしか出来なかった。さて、男坂を終えたとお寺の事務所の窓口に出るが何とここでお守りなどの販売(あくまでお布施にてお譲りする形なのだろう)とともに『1円玉』を両替しているではないか。「何だ、勇氣を出してホテルでお願いする必要はなかったのか?」と多少がっかりするも、意気込みとして事前に準備する行為に意義があるのだと思いついた。ちなみに1円玉を見ると帯封(硬貨の包装紙)にも地元の金融機関名と『薬王寺』の文字が見えた!

薬王寺の『専用帯封』があるのである。下世話な話だが、この奇習で1年間に参拝していくの1円玉が集まりお金落ちるのであるつか。お寺の経営的にもよく考えられた風習である。

さて、最後の本殿に続く階段の前にて入場制限がかかる。さぞかし本殿前が混み合っているのかと思うと、後ろから取り取りと熊手のような物を持った4、5人の初老の寺男が「ちよっとすみませんね!」と言って誰もいない階段の中に入った。すると階段にたまった1円玉(5円玉、中には10円玉も少数ある)を起用に回収し始めた。その間に100円とお金

が小気味よく落ちる。参拝者に受験生がいたら気を悪くするくらいに転がり落ちる。ただその硬貨も下にいる寺男が回収して、本来ある石の階段の色が姿を現す。多少の回収漏れは気にせず専用竹熊手で回収するところを見ると、恐らく階段で硬貨に滑って参詣者が転倒や転落したりすることを防ぐ目的の入場制限のようである。大方片付くと、「それでは今から開けます。」と先頭のロープが解かれると参拝者が皆、厄除け動作を開始。ある程度要領を得た為、5分程度で60段程を儀式込で昇れた。誠にあっけなくだが厄除けを終えるもお金を捨てる行為は結構気持ちがいい。私は自分では貧乏性の部類だと思っているが、流石に合計100円程度のお金なら「もったいない」という気も起きず、清々しく手放せた。むしろ100円は朝の両替行為を含め、使ったことにはこのままで貴重で長持ちするのかもしれないと感じることができた。もしかしたら子供にお金の大切さを教えるにはこの儀式はいいのかも知れない。(そういえばお子さんが儀式に参加し



薬王寺全景と門前の露天。奥に特長ある『瑜祇塔(ゆぎとう)』が見える

た。お守りも1時間強走っていき、急に田舎の道路にもかかわらず渋滞が始まった。ナビを見ると『薬王寺』より1kmも手前である。参拝渋滞である。15分程の渋滞をやり過ごした後に漸く駐車

場へ入れた。山の中腹にある境内には参拝者の行列が見え、さらに奥には朱色の閻魔様の帽子を逆さにしたような特徴的な形の塔がそびえていて、歴史あるお寺の雰囲気を感じ出している。塔には登れるようで上から手を振っているお子さんの姿もあった。車から下りて華やかな露店の前を通り、入り口まで行くと既に1円玉が舗装された道に数十枚以上キラキラと日の光りを受け輝いている。ここからもう1円玉を置いたのか、参拝者の靴についたものがこぼれ落ちたのかは不明。坂まで続く参道の途中には歴史小説家である有名な吉川英治や司馬遼太郎の作品の舞台となった記念の石碑があったりする。その後は女坂3段、男坂42段の男女厄坂61段に1円玉をおくのだが、当方は42才の男厄の為、女坂とはして男坂より厄除けの儀式を開始する。周りを見ると皆一様に1年間このために集めていたのか、しわしわのビニール袋を持った人がおもしろいことに1円玉を置いていた。中には貯金箱に入れて持ってきている人も。ただ坂の幅も狭く、初詣ということからほとんど人が来る為に、悠長にお金を置くことは許されない。中には端のほうで一段づつ時間をかける人もいるが、ほぼ皆、時間をかけずにパッと小銭を置く事になり、きれいに置くことは難しい。また、階段に積み重なった1円玉を参拝者が階段ごと踏みしめ昇る為、あたりで1円100円が見られる。また、何もわからない小さい子供が必死に1円玉を拾っているのを母親が「駄目!厄を拾つわよ!」と止めさせる光景も見られる。あと厄年と思いき年齢の参拝者以外の例えば子供さんや高齢者の方がこの厄払い儀式に参加していた。このことからこの奇習が

この地にすっかり根付き、民間信仰の年中行事としてまた手軽な娯楽の要素としても受け入れられていることを伺わせた。私は100枚のコインをポケットに崩し入れ、階段にさしかかっただけから多少中腰気味に1円玉を置いていく。始めは心の中で手を合わせるも、階下からのブッシュや姿勢も辛く正直邪魔くさくなる。結局は情性で1段になんと1枚置ければよく、またなるべく転がさぬようにすることしか出来なかった。さて、男坂を終えたとお寺の事務所の窓口に出るが何とここでお守りなどの販売(あくまでお布施にてお譲りする形なのだろう)とともに『1円玉』を両替しているではないか。「何だ、勇氣を出してホテルでお願いする必要はなかったのか?」と多少がっかりするも、意気込みとして事前に準備する行為に意義があるのだと思いついた。ちなみに1円玉を見ると帯封(硬貨の包装紙)にも地元の金融機関名と『薬王寺』の文字が見えた!

薬王寺の『専用帯封』があるのである。下世話な話だが、この奇習で1年間に参拝していくの1円玉が集まりお金落ちるのであるつか。お寺の経営的にもよく考えられた風習である。さて、最後の本殿に続く階段の前にて入場制限がかかる。さぞかし本殿前が混み合っているのかと思うと、後ろから取り取りと熊手のような物を持った4、5人の初老の寺男が「ちよっとすみませんね!」と言って誰もいない階段の中に入った。すると階段にたまった1円玉(5円玉、中には10円玉も少数ある)を起用に回収し始めた。その間に100円とお金